

「児童文学」の終わりと始まり

藤田 のぼる

1

本年一・二月号から開始したこの連載も、最終回を迎えることになった。まずはここまで述べてきた大枠について確認しておきたい。一九六〇年前後から数えて五十数年になる「現代児童文学」の時代区分について、僕は第一期、第二期、第三期と分けた。もともと第三期は二〇〇〇年代中頃からということ、ここ数年前から始まっているという形だから、主には第一期、第二期について論じることになった。前回述べたように、第一期から第二期への移行期は一九八〇年前後からの数年にわたる。従って、連載の第三回で考察した六〇年代が第一期前期、第四回で論じた七〇年代が第一期後期、そして前回の八〇年代が第二期前期ということになる。ということ、今回考察する九〇年代及び二〇〇〇年代（以下、〇〇年代）前半は、第二期後期ということになる。但し、第一期が一九七〇年辺りを境に

かなり明確に分けられる（しかも、それはかなり自覚的、意思的な変化だった）のに比べると、この第二期の前期・後期というのはかなりに錯綜しており、しかも書き手たちが意思的にとりより、さまざまな状況の中で、否応なく「そうなっていた」という変わりようのように思われる。さて、前回述べた一九八〇年代の児童文学の風景だが、僕は第一期の「単線」に対して、第二期の児童文学状況が「複線」であるとして、それを三つの路線としか傾向に大別した。一つめは「ズッコケ三人組」シリーズに代表されるエンターテインメントの路線、二つめは「小説化」と名づけた、〈物語〉的な要素よりも〈小説〉的な要素の強い（その結果、多くの場合、大人の小説に雰囲気近くなつた）作品群、その代表例としては舟崎靖子『とべないカラスととべないカラス』と加藤多一『草原―ぼくと子っこの大地』をあげた。そして、三つめの路線（これは傾向というほうがふさわしいが）として、こなれない言い方だ